

ポートフォリオで生徒の学びをつなぎ 高校・大学を通して成長と進路選択を支援

甲府南高校(山梨・県立)
山梨大学(山梨・国立)

校外と校内の知恵を合わせた 学校独自のポートフォリオ

甲府南高校は、2018年度の新生より、学習や活動の履歴となるポートフォリオを、生徒一人ひとりが3年間かけて作成していく、という取り組みをスタートさせた。

そのポートフォリオの形式は、独自に設計したもの。先生たちが2つの側面から得てきた知見を、うまく組み合わせ、まとめてみたといえる。

具体的には、一つは、2017年4月から始まった「山梨高大接続研究会」で、大学や高校の先生たちと話し合うなかで身に付けた見識。

もう一つは、2004年度にSSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受けて以来、先生たちが生徒の学びを深めようと試行錯誤して積み上げてきたノウハウだ。

これらの知見をもとにして、甲府南高校はどのようなポートフォリオを設計したのだろうか。

何のために何をどう残すか 県内の大学や高校が共に検討

山梨高大接続研究会は、山梨大学と山梨県教育委員会が連携して立ち上げた研究会だ。高大接続に関する現状の課題を検討することが目的で、県内の11高校も参加(図1参照)。2017年度4月より、2カ月に1回程度の頻度で集まり、意見交換を重ねてきた。公開制にしたことで、回を重ねるごとに他の大学や高校の出席者も増え、最終的には6大学・28高校が参加したという。

その研究会の主題の一つが、他でもない、ポートフォリオの作成と活用だった。学習や活動の履歴というのは、何をどのように残せばいいのか。それを誰が、何のために、どのように評価するのか。甲府南高校から会に参加した小林真美先生は、高校側の思いをこのように語る。

「入試改革が行われるなかで、例えば『主体性を持つて多様な人々と協働し

て学ぶ態度』を、大学はどうやって評価するのか。それに向けて高校ではどんな履歴を残せばいいか。そこを一緒に考えたい、というのはありました。一方で、高校生のさまざまな活動を大学側に知ってほしいもあつたんですよ。それを踏まえて評価の仕方を考えてほしい

な、と」

始まった研究会では、参加者同士が事例を出し合つてポートフォリオへの理解を深めていった。山梨大学の藤修准教授は、高校の先生たちと共有した基本の考えを次のように語る。

「ポートフォリオというのは、言うなれば『成長の記録』なんです。良いことだけではなく失敗したことも記録する。そうしてピカピカの体験からガラクタのような体験まで蓄積していくと、すべてが成長につながる宝物になるんです。留学や部長経験など目立つ経歴をとにかく並べればいいわけではありません」

例えば、目ぼしい活動は部活動のみ、という生徒がいたとする。けれども、そ

図1 山梨高大接続研究会の概要



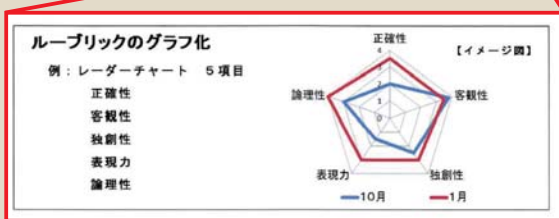
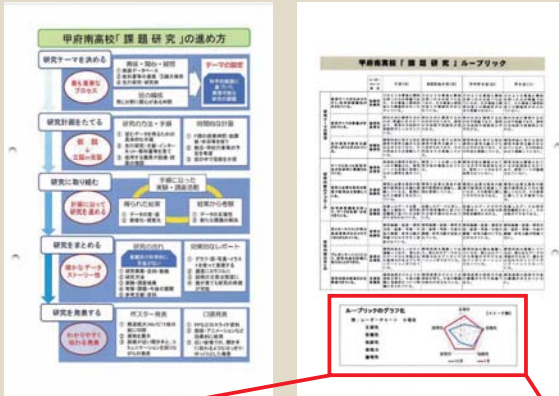
※公開制の研究会で、研究校以外の参加も可。2017年度は県内の28高校・6大学が参加



図2 甲府南高校のポートフォリオの構成

① 課題研究のガイドライン

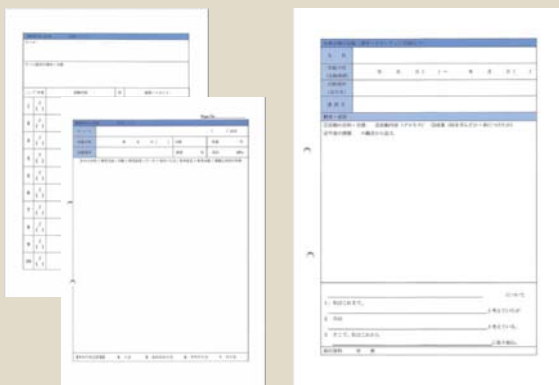
課題研究の進め方を図示したページ、課題研究で「何をできるようになることを目指すか」の評価の観点を示したルーブリック、それをもとにした採点表のページが続く。目標をもって活動することや、振り返りで自己評価することを、生徒がやりやすくなる。



学期ごとなどに自己採点の結果をレーダーチャートにまとめれば、自分の得意分野や成長も一目瞭然だ。

② ポートフォリオ部分

課題研究や各種活動について、出来事だけでなく、目的・目標、プロセス(手順等)、成果、残った課題などがわかるようにまとめる



課題研究は、全体の経緯を見開きにまとめるOne Page Portfolioや、毎回の活動ごとにまとめる研究ノートがベース。切抜き資料などもファイルする。

各種活動——講座やボランティアへの参加、資格取得、発表会や大会への参加などは、1枚にまとまるように情報を凝縮し、再構成して記録。

③ 参考資料

これまでの先輩の課題研究のテーマ例、ポスター発表例、口頭発表例を掲載。研究したことをどのような形にして発表するのかを、生徒がイメージしやすくなっている。



山梨大学
アドミッションセンター
藤 修准教授



甲府南高校
教諭
小林真美先生



甲府南高校
教頭
早川保彰先生

「生徒が活動内容を書き込む用紙に『目的』『手順』『気付いた点』『成果』『今後の課題』といった記入項目を示しておくことで(図2②参照)、活動を通しての成長の過程も記録として残るようにしました。項目ごとに記入欄を

設けなかったのは、枠にとらわれずにスペースを自由に使ってほしかったからです(小林先生)

課題研究の学びが深まり成長も実感できるように

甲府南高校のポートフォリオにはもう一つ特徴がある。研究校の多くがデジタルポートフォリオの活用を検討するなか、同校は紙ベースのポートフォリオの作成を軸に据えたのだ。

背景には、原型となる活動を既に行っていたことがある。SSH校として注力してきた「課題研究」。生徒が自ら研究テーマを見つけ、グループで実験や調査、発表に挑むという授業で、そこでは紙の記録を残すことを前から大

事にしてきたのだ。

「課題研究では、アナログの構想メモや実験ノートが考えを深める鍵になることが多々あります。デジタルポートフォリオでは、そこが見えづらくなるのではないかと。本校はこれからも課題研究に重きを置きたいので、生徒の探究の足跡がはつきりと残る紙ベースのポートフォリオでいくことにしたのです(小林先生)

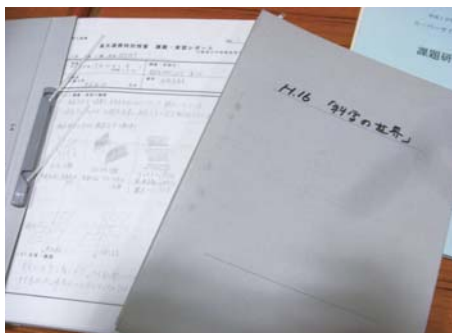
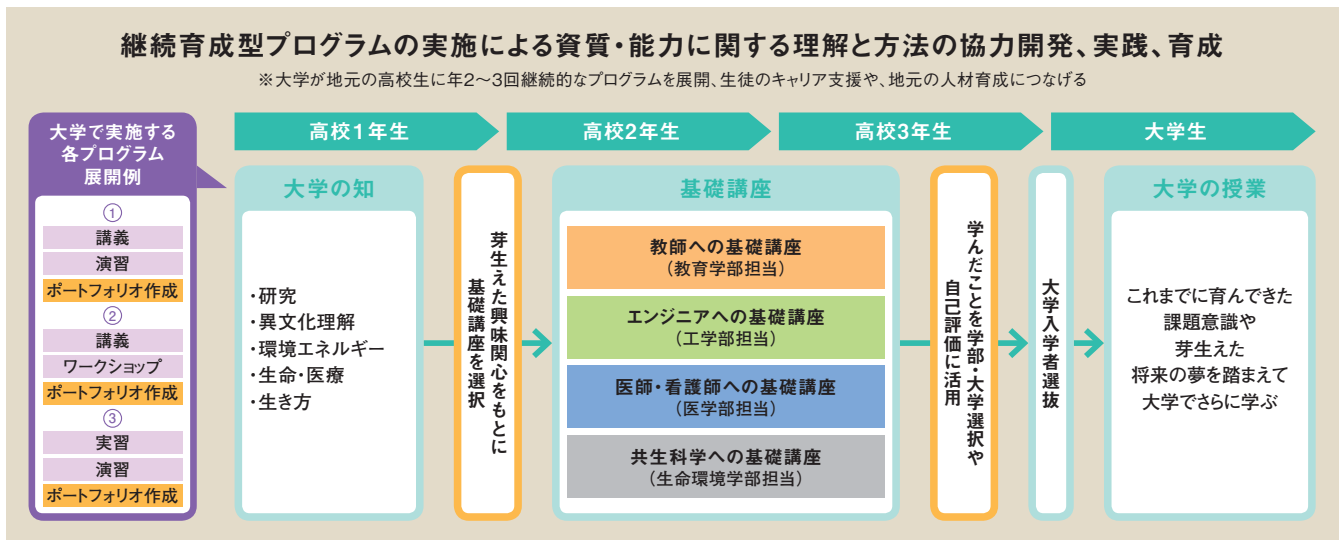
しかもその記録の残し方は、教頭の早川保彰先生の話によれば、少しずつ進化させてきたものでもあった。

「SSH1期目は、『せっかくの生徒の研究だから形あるものに残そう』という感覚でした。これが2期目になると、SSHの認知度が高まり、生徒が受験

先で『SSHで何をしたら』を問われ出します。そこで活動全体の経緯を1枚にまとめるOPP(One Page Portfolio)も導入しました。続く3期目には、課題研究の評価の観点を示すルーブリックを作成しました。活動する際に『何を指せばいいか』を生徒が意識できるようにし、活動のあとで自己評価や相互評価による振り返りもできるようにするためです(早川先生)

さらに4期目2年次の今年度からは、課題研究だけでなく、日常的な特別活動や課外活動の記録も残していく形式にパワーアップ。ポートフォリオ『Frontier Discovery』として新1年生からの活用を始めています。

図3 YAMANASHI-WAYの構想



2004年度の課題研究の実験ノート。グループを組んだ生徒たちで協力して1冊の活動記録をまとめていた。



2018年度1年生向けのポートフォリオ。それぞれの生徒が自分のファイルに課題研究や各種活動を記録。

入試だけの高大接続ではなく 継続育成型のプログラム開発も

もつとも、導入したポートフォリオには、活用面ではまだ課題もある。「これだけの記録を、大学入試にはどう活用するか。そこはまだ見えていない部分が多いです」(早川先生)

この点は、まさに山梨高大接続研究会でも課題になっているという。「ポートフォリオというのは蓄積して終わりではないのです。その成長の過程を自身で俯瞰したり、他の人にも伝えたいなら、『加工・再構成』するスキルも必要になります。蓄積したポートフォリオをもとに、調査書や活動報告書を作成するといったように」(藤准教授)

ところが、入試のための調査書ひとつとっても、いろいろな意見があつてまだ不確定な要素が多いのだ。「例えば高校の先生方には『大学は全

員の調査書を本当に見る時間がありますか?』という懸念があり、大学側には『調査書に書かれていることは本当ですか?』という不安があるのです。こうした問題はどうすれば乗り越えられるのか。漠然とした話になりますが、私はやはり、高校と大学が今以上に連携し、信頼関係を深める以外ないと思っ

ています」(藤准教授)

こういった背景のもとに、山梨高大接続研究会は2018年度より、YAMANASHI-WAYと名付けた高大による研究実践にも乗り出した。研究校の高校生数十名が、山梨大学で年2~3回のプログラムを継続して受講。各プログラムごとにポートフォリオを使って振り返りを実施、考えたことや成長の記録が残るようにし、さらにつひとつとつ体験を点と点を結んで線にするようにつなげていくことで、進みたい道を自分で描けるようにする構想だ(図)

3参照。

「高校生が自身の成長を記録する『ポートフォリオ評価』に取り組み、そこを起点に大学や実社会でやりたいことまで思い描く『キャリア・パスポート』に発展させていく、というイメージですね。そしてその活動を見守るなかで、我々もポートフォリオや高大接続の在り方について学びを深めていきましょう、と呼びかけています」(藤准教授)

成果、気づき、失敗... すべての記録が次への財産に

そのように将来まで見すえてポートフォリオを作成していくことは、甲府南高校でも目指していることだ。「本校のポートフォリオが入試にどう役立つかはまだ見えませんが、こうした記録を残していくことには迷いはありません。生徒が自分のことを考えていけるよう、手元にあるべきだと思えますから」(早川先生)

「課題研究やいろいろな活動が、記録を残すことで今以上に『次につながる』ものになってほしいですね。この活動でこんなことを感じたからあの分野に進みたくなった、途中で進む道が変わったけれど、それは記録を見返すなかで、意外なところと本当に自分のやりたいことがあると気付いたからだった、とか。失敗も失敗のままに終わらせず、全部財産にしてほしい。生徒にはそんな心つもりで、ポートフォリオを作成してほしいと思っています」(小林先生)